

● 論文（査読を経たもの）

サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造 ——中国新疆ウイグル自治区における調査研究に基づいて

シャザディグリ シャウティ
夏扎提古丽・沙吾提

目次

はじめに

I. 本研究の枠組み

- (1) 日常的コンピテンスの概念
- (2) サクセスフル・エイジングとサード・エイジ

II. 研究の方法

- (1) 調査対象地域の概要とサンプリング
- (2) 調査の方法
- (3) 分析の方法

III. 結果

- (1) 頻度分布
- (2) サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造
- (3) 日常的コンピテンスを構成する尺度の信頼性

IV. 結び

キーワード

サードエイジャー (third-ager)

日常的コンピテンス (daily life competence)

新疆 (Xinjiang)

● ARTICLE (REFEREED)

Structure of Everyday Competence for the Third Ager:
Based on the Field Research in Xinjiang Uygur Autonomous Region, China
by SHAZADIGUL SAWUT

サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造
——中国新疆ウイグル自治区における調査研究に基づいて

シャザディグリ シャウティ
夏扎提古丽・沙吾提

1. はじめに

日本社会は今急速な勢いで、高齢化が進行している。内閣府が2019年7月31日に発行した「高齢者白書」によると、65歳以上人口は急速に増加しており、2018年10月1日時点で、65歳以上の人口が3558万で、総人口に占める割合（高齢化率）が28.1%となっている（内閣府、2019）。そして、中国でも高齢者が進んでいる。中国統計局によると、2018年末で中国60歳以上人口は2億4900万人、総人口の17.9%を占めており、日本の総人口の約2倍になっている。もちろんこのような現象は日本と中国に限ったことではない。先進諸国はどこでも、程度の差はあるが、高齢化が進行しており、「Global Aging」と呼ばれるように、人口高齢化は世界で進行している現象の一つである。特にアジアの高齢化は急速かつ大規模で、その社会にもたらすインパクトは測り知れない。人口高齢化の影響は医療・福祉領域にとどまらず、経済・産業・文化の広い領域で相互に関連する複雑な課題を提起している。例えば、労働に従事しない依存人口比率の上昇や認知症・虚弱高齢者の介護など深刻な問題が顕在化している一方、高齢者を社会資源と捉え新しい雇用や産業の誕生に対する期待も高まっており、高齢期における自立生活の問題は、個人にとっても社会にとっても、疑いもなく現在および将来の重要な課題である（シャザディグリ、2014）。

高齢化問題や高齢者の継続雇用が喧伝される中で、人々は身体的にも、経済的にも、精神的にも自立した老後生活を送りたいと願っており、低迷する経済の下で超高齢化社会の到来を迎えようとしている社会は、その存続・発展のために高齢者に強く自立生活を求めている。言い換えると、いかにして身体的、経済的、精神的自立を維持し、どのようにしたら長い老後生活を充実感・満足感を味わいながら送ることができるかが高齢者個人の重要な課題になっていると同時に、誰しもが自立した生活の中で幸福感を味わえるような満足のいく老後を送りたいと願い、そのことが社会的価値となっている（Guralnik et al., 1994; 小田、1999; 平澤、2011; シャザディグリ、2014; 吳炳义ほか、

2019)。言うまでもなく、今日の社会における自立生活に必要なものはどのようなものであり、それがどの程度必要で、その育成や支援にどのようなことが求められるかを把握することが一層重要になっている。

ところで、自立生活とは「他者からの援助や支配を受けることなく自らの力で生活することである」が、それを可能にするには、そのために必要な活動能力を保持していなくてはならない。そうした活動能力に関しては、日常的コンピテンスあるいはライフスキル^{注1} やリビング・スキル^{注2}などの概念の下で研究されてきている（Willis, 1991; 小田, 2004）。高齢者のそうした日常的コンピテンスに関する関心は比較的早くからであり、高齢者の生活習慣病に関する研究や老年医学的研究等様々な領域、側面から研究されてきた（Katz et al., 1959; Katz et al., 1963; Katz et al., 1970; 小田, 2004）。

本稿では新疆ウイグル自治区におけるアンケート調査から得られた結果の一部を用いて、高齢期の自立生活に求められる日常的コンピテンスの一端と、その構造を明らかにしたい。

I. 本研究の枠組み

(1) 日常的コンピテンスの概念

日常的コンピテンス（Everyday Competence）とは、成人が自立生活を送るために必須と見なされる諸活動を十分に行うことができる能力（ability）または潜在的可能性（Potential）のことを示す概念である（Willis, 1991; Willis, 1996; Diehl, 1998; Baltes et al., 1993; 小田, 2004; 杜鵬, 2006; 吳炳义ほか, 2019）。ただ、一口に日常的コンピテンスと言っても、その中身は多様である。その下位カテゴリには、例えば、自分の世話、飲食、買い物、軽い家事、重い家事、法的事柄、郵便関係、読書、会話、金銭の管理、等多様ものが考えられる。更に、個人の日常的コンピテンスの水準は、個人の知識やスキルと生活環境からの要請との関係で決まる。従って、高齢者の日常的コンピテンスの構造を明らかにしようとする場合、どのような観点から、どのような事柄を取り上げるかが重要な課題となる。

そこで、欧米諸国における高齢者の日常的コンピテンスに関する調査研究を見ると、実の多くの測定尺度が考案され、利用されている。主なものは次の通りである。

- ① ADL（Activities of Daily Living: 日常生活動作）（Dodge, et al., 2005）
- ② IADL（Instrumental Activities of Daily Living: 手段的生活動作）（Jonghoon et al., 2014）
- ③ SAILS（Structured Assessment of Independent Living Skills: 自立生活スキルの構造的評価）（Mahurin, 1991）

- ④ PADL (Physical Activities of Daily Living: 身体的日常生活動作) (Osler M et al., 1991)
- ⑤ SAFS (Structured Assessment of Functional Status: 技能状態の構造の評価) (Diehle, 1998)
- ⑥ EPT (Everyday Problems Test: 日常問題テスト) (Willis and Marsiske, 1993)
- ⑦ ALSR (Assessment of Living Skills and Resources: 生活技能と資源の評価) (Diehl, 1998)
- ⑧ B-ADL Scale (The Bayer Activities of Daily living Scale: ベイヤー日常生活活動スキル) (Hellmut, et al., 2001)
- ⑨ DAFS 尺度 (Direct Assessment Functional Status: 技能状態の直接評価) (Loewenstein et al., 1989)
- ⑩ ECQ (Everyday Competence Questionnaire: 日常的コンピテンスアンケート) (Kalisch, et al., 2011) 等々。
- ⑪ OTDL (Observed Tasks of Daily Living: 観察された日常生活タスク) (Lawton and Brody, 1969; Diehle, 1998)
- ⑫ MFAQ (Multidimensional Functional Assessment Questionnaire: 多次元機能評価アンケート) (Fillenbaum, 1985)
- ⑬ EPSI (Everyday Problem Solving Inventory: 日常生活問題解決検査票) (Cornelius and Caspi, 1987)

しかし、日本における先行調査研究を調べてみると、青少年を対象とするライフスキルに関する調査研究が多いが、高齢者を対象とする日常的コンピテンスに関するものは小田 (1997, 1999, 2004) の研究、長田 (1994) の研究、村田 (2010) の研究、平澤ほか (2011) の研究、及び溝川ほか (2017) の研究しか見当たらないが、自立生活に必要な最低限あるいは最小限度の諸活動に焦点を当てて活動能力を測定することを目的とした ADL や IADL 尺度に関する調査研究は非常に多い。

そうした目的で行われた調査研究の殆どが臨床的観点から行われており、その一つの特徴として、老年医学や医学の分野において、ADL や IADL 尺度を要支援、要介護状態に移行する可能性のある高齢者を早期に把握するスクリーニング尺度とされている。もう一つの特徴として、理論的研究枠組みを明確にした実証研究が見出せることが注目される (古谷野, 1992; 中越ほか, 2019 等)。そして、三つ目の特徴として、高齢者の日常的コンピテンスとライフスキルの問題が高齢期における社会的適応の向上とサクセスフル・エイジングに関わる問題として、取り組まれている (小田の研究事例) ことが確認できた。最近のアメリカにおける社会老年学もしくは老年社会学の研究分野においても、サクセスフル・エイジングの視点から行われた高齢者の日常的コンピテンスに関する調査研究が見られるようになっており (Gill et al., 1995; Diehl, 1998)、小田利勝が高齢者の日常的コンピテンスに関して行っている調査研究は、そのような研究としても注目される。

他方、中国における日常的コンピテンスに関する先行調査研究を調べると、幼児や

青少年の自立生活の視点から論じるものが非常に多いが、高齢者の日常的コンピテンスに関する研究が試みられるようになったのは、1989年以降のことである。そして、本格的な調査研究が行われるようになったのは2007年からであり、比較的最近のことである。例えば、尹徳挺（2007）や章美娟（2007）、庄晓伟ほか（2012）、李聡ほか（2017）等が、都市部における高齢者の日常的コンピテンスと健康の関連について取り上げている。それらの調査研究では、自然環境や地域の経済水準、及び健康状態の日常的コンピテンスへの影響を無視できないことが明らかにされている。

また、公開されている書籍や論文、及びその他の関係資料から見ると、中国における高齢者の日常的コンピテンスに関する研究の最も大きな特徴は次の4点である。

- ①老年医学の視点から行われている。
- ②高齢者の日常的コンピテンスの尺度として最もよく扱われている尺度は、ADL、IADL、PDALである。
- ③ライフスタイルの影響を指摘する研究者もいるが、理論的研究枠組みを明確にした調査研究が見られない。
- ④臨床的な目的で高齢者の健康状態や病気との関係に注目する研究が多い。

もちろん、高齢者の日常的コンピテンスを真正面から取り上げた研究もあるが（牛田華ほか、2010；徐晓明ほか、2010；李芸ほか、2012；许霽丹、2019）、それらの研究の主な関心は、ADLやIADLといった、身体的自立を可能にする最低限度必要な身体的活動あるいは身体機能に向けられており、日本の老年医学や医学研究分野における調査の研究の傾向と似ている。そして、1990年代の調査研究で測定される生活活動能力とは、部屋または住宅というごく限られた生活空間における自分自身の身の回りの世話の可否に関わるものであったが、その後より広い生活空間である地域における自立生活に必要な最低限度の日常的活動能力を示すようになってきている（何燕玲、1989；杜鹏、2006）。

ところで、日本における近年の高齢者の日常的コンピテンス研究から示唆された内容は次の点である（長田、1994；小田ほか、1997；小田、1999；小田、2004；溝川ほか、2017）。

- ①要支援、要介護状態への移行の早期把握のため、IADL以外の要支援・要介護要因を含めた尺度の検討が必要である。
- ②同じ尺度を利用したとしても、質問の形式は、普段その活動を「していますか」と聞くのと、その活動が「できますか」と聞くことの違いに注意する必要がある。
- ③老化度と有意な正の相関関係にある日常的コンピテンスもあれば、有意な負の相関関係にある日常的コンピテンスもある。
- ④幸福感と有意な正の相関関係にある日常的コンピテンスもあれば、有意な負の相関関係にある日常的コンピテンスもある。
- ⑤心理社会的ライフスキルのサクセスフル・エイジングへの影響が大きい。
- ⑥高齢期の生活を充実させる日常的コンピテンスにどのようなものがあるかについて検討を重ねる必要がある。

他方、中国における高齢者の日常的コンピテンスに関する調査研究（張文娟ほか、2003；陳静、2007；尹德挺ほか、2007；章美娟、2007；宋爱芹、2013）と新疆においてこれまでに行われた高齢者に関する調査研究（シャザディグリ、2006 and 2014；徐小凤、2018）から示唆されたことは次のような点である。①高齢者の日常的コンピテンスは民族間の共通点と相違点に注目する必要がある。②日常的コンピテンスの居住地域（都市部と農村部）の相違と自然環境の差異に留意する必要がある。③日常的コンピテンスの低下が高齢者の健康状態や認知能力と高い相関がある。④居住地域の経済水準が低いかどうか、その地域に住む高齢者の健康状態に影響し、結果的に維持しうる日常的コンピテンスの規定要因になっている。⑤高齢者が維持しうる日常的コンピテンスと中高年の慢性病率の相関が非常に強い。⑥長寿と高齢者が維持しうる日常的コンピテンスの相関が強い。

日常的コンピテンスに関する調査研究で最もよく用いられている ADL 尺度と IADL 尺度は、自立生活に必要な最低限あるいは最小限度の諸活動に焦点を当てて活動能力を測定しようとするものであるが、それらの調査研究における日常的コンピテンスは今日の高齢期における満足のいく自立生活（Gill et al., 1995）、言い換えれば、サクセスフル・エイジングにかかわる諸種の活動能力を的確に判定する尺度としてではなく、高齢者の病気や健康状態を判断する尺度として扱われている。しかし、自立的に「生活する」ということは単に他者からの援助なしに「生存する」ということではない。直接観察できるものだけで日常的活動能力を評価しようとするれば、ADL、IADL、OTDL、PADL の尺度のように取り上げる活動は限られてくる。もとより、臨床的目的で、高齢期の自立生活に必要な最低限度の活動能力を測定するというのであればそれでもかまわないが、そうした限られた活動の能力を測定するだけで高齢期における現実の日常生活能力を的確に判断できるかという問題が生じる。

上記のように、これまでの調査研究では、高齢者の自立と自立支援の視点から重要な課題であるという認識が共通している（Lawton and Brody, 1969；Fillebaum, 1985）が、Diehl（1998）と小田（2004）が指摘しているように、高齢者の日常生活活動能力を評価するために“黄金標準”（gold standard）として一般的に受け入れられている測定尺度は未だない。

そこで、本研究では、これまでの日本や中国における高齢者の日常的コンピテンスに関する調査研究で最もよく用いられている ADL もしくは IADL に関わる項目を取り上げず、Baltes et al.（1993）の 3 つの次元や Living Skills II（Wycherley et al, 1994；小田、2004）でいう心理社会的スキルに関わる項目として作成した 128 項目を取り上げる（調査票は中国語とウィグル語で作成し、調査もそれぞれの言語で実施している）。

コンピテンスの概念に基づいて測定しようとするものは「していること」ではなく、「できること」であるから、Willis (1995) や小田 (2004) が指摘しているように、質問の形式は、普段その活動を「していますか」ではなく、「できますか」ということになる。但し、「できること」を聞くということは、実際には「していない」に対しても、「できますか」と聞くことである。必要な時にそれを遂行することが「できる」、あるいは、やろうと思えば「できる」と本人もしくは周りが思っている、その時になって果たしてできるかどうかは本当のところわからないから、「できる」、「できない」は結局わからず終わってしまう(小田, 2004) ことになる。

本研究では「次のような事柄は、あなた自身に、どれくらい当てはまりますか」と尋ね、「自分にピッタリ当てはまる」、「自分にだいたい当てはまる」、「自分にはあまり当てはまらない」、「自分には全然当てはまらない」の4つの選択肢を用意した。

(2) サクセスフル・エイジングとサード・エイジ

サクセスフル・エイジングというのは、病気がないというだけではなく、また、諸機能が維持されているというだけではなく、それらが、日常生活に積極的に関与していて活動的な人生を送っていることと結びついていなければならないというのである。そして、長期縦断的研究の結果に基づいて、高齢者における病気や障害は、生体の加齢過程に伴う変化に起因するだけではなく、外的要因の影響が大きく、年齢が上がるにつれて遺伝的要因の影響力は相対的に低下し、変わって非遺伝的要因の影響力が相対的に上昇するから、個人および環境から外的危険因子を除去することができれば諸機能の喪失を最小限に食い止めることができ、活動的な高齢期の生活を送ることができる (Rowe and Kahn, 1987; 1997; 1998)。

サクセスフル・エイジング研究が提唱されてから40年が過ぎた(小田, 2003)。その間に中国も日本も大きく変わった。高齢化が一層進み、高齢者・高齢化問題は、量的にも質的にも当初とは比較にならないほど深刻化している。そして、社会全体の条件が著しく悪化していることによって、サクセスフル・エイジングの社会的意義を変えつつある(小田, 2004)。他方、サクセスフル・エイジングの問題は、成人一般に期待される職業的役割を果たし終えた後の退職後の生活をいかに過ごすかが課題とされてきた。高齢期の社会的適応に関する代表的な理論(学説)とされる離脱理論や活動理論もそのことが前提になっており、高齢期の生きがいをめぐる論議もそうである。サード・エイジそしてサードエイジャーというアイデアは、少子高齢社会において個人の側と社会の側の双方から生まれるべくして生まれたということができよう(シャザディグリ, 2014)。

ここでいうサード・エイジとは、高齢期を心理社会的発達最終段階としてではなく、生涯発達論的観点から人生を4区分したときの達成・充実・完成の期間であるサード・エイジの一時期としてとらえる考え方がある(小田, 2001; 2004)。サードエイジャーとは、その期間にある人々を指す。サード・エイジの概念は暦年齢を基準としたものではないが、便宜的に40代あるいは50代以降を指すなど、いわば中高年の代名詞として使われることも多い。他方、サードエイジャーという考え方は、就業・退職形態が多様化するに連れて退職と年齢の関連が不明確になり、退職者や退職後の生活といった場合、それが指示する内容が一意的なものではなくなった中で登場してきた概念であり、現代における高齢者の存在は一様ではなく、多種多様な存在であることを意味する概念でもある。したがって、小田(2001)が指摘しているように、現在、そしておそらくは将来も、高齢化問題の焦点を形成するのは、このサードエイジャーであることは疑いがない(小田, 2004)。

ラスレット(Laslet, 1996)は、誕生から死までの人間の一生(life course)を、「依存・社会化・未熟・教育の時代」であるファースト・エイジ(the first age)、「成熟・自立・生殖・稼ぎと貯蓄・家族と社会への責任の時代」であるセカンド・エイジ(the second age)、「達成(personal achievement/fulfilment)の時代」であるサード・エイジ(the third age)、「依存・老衰・死の時代」であるフォース・エイジ(the fourth age)の4段階に区切った。しかし、それは、様々な心理社会的発達段階の区分や幼年・生産年齢・老年あるいは前期高齢者(young old)・後期高齢者(old old)・晩期高齢者(oldest old)といった人口の年齢階層区分とも異なる。そして、人生の最盛期・達成期・完成期であるサード・エイジの始期と終期は個人によって異なる。それがいつかという判断は、本人の主観に委ねられることさえあろう。その個人の人生の目標や生き方、そして身体的活動能力や健康度によって異なるからである。要するに、誰でもが同じような人生の4段階を経るわけではなく、その期間や時期も異なるということである(Laslet, 1996)。

サード・エイジにおいては、人々は、セカンド・エイジにおける働いて収入を得ることや貯蓄すること、独立心や責任感を醸成して人間的成熟をめざす、といったことに対する社会的強制力は弱まる。それらは、このサード・エイジにおいては既に達成されていなければならないからであり、サード・エイジが人生の頂点とか完成の時期とされるのもそのためである。社会的強制力が弱まるということは、行動や思考、生活の様式がより自己管理的になるということである。目標設定およびそれを実現する手段や方法、時期の選択についても、より一層主体的になり(ならざるをえなくなり)、動員できる個人的諸資源が種々の活動の量や質、そして生活様式を左右するようにな

る（小田、2004）。

他方、日常的コンピテンスや個人的資源の水準の相違は、それ以前の時期において既に所有していたかあるいは獲得したか否かによるところが大きいといえるが、それ以上に重要なことは、サード・エイジにおいてそれらを効果的に活用できるか否か、そして、それらを更に洗練できるかどうかということであり、また、新たに獲得できるかどうかということである。したがって、自ら設定した目標の実現や種々の生活課題を処理する上で必要な個人的資源を洗練し、開発することが、サクセスフル・エイジングへ向けたサード・エイジの大きな課題とされるのである。そして、そのことは、個人のサクセスフル・エイジングにとどまらず、社会のサクセスフル・エイジングにとっても重要な課題とされる。したがって、高齢化社会におけるサクセスフル・エイジングの問題を考える上で、サードエイジャーに焦点を当てて展開させることの利点が多いと考える。

本稿は、以上のような先行研究の検討を基に、新疆ウイグル自治区におけるサードエイジャーの日常的コンピテンスに関する調査データを用いて、サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造の検討を行ったものである。

II. 研究の方法

本稿で扱うデータは、博士論文のために行った調査で取戻したデータの未使用の部分で、今回改めて分析したものである。2007年5月25日から6月20日までに実施した調査であり、調査対象地域の概要とサンプリング、調査の方法や分析方法などは、次の通りである^{注3}。

(1) 調査対象地域の概要とサンプリング

新疆ウイグル自治区は、中国の最西部に位置し、面積は165万km²と中国の省・自治区の中で最大であり、中国全土の約1/6を占める（日本の約4.5倍）。総人口は約2,008万人で、漢民族39.6%、ウイグル族45.9%、カザフ族7.0%、回族4.4%、モンゴル族0.9%のほか、キルギス族、シボ族、タジク族、ウズベク族、タタル族などの44民族からなる多民族自治区である。高齢者人口は187万人で、全人口の9%を占め、毎年4.4%増加している（シャザディグリ、2014）。

中国における高齢者あるいはサードエイジャーを対象とした研究は緒についたばかりであり、とくに新疆ウイグル自治区においては、それらに関する基本的データさえ

表 1. 調査対象地域の人口と標本数

		人口 (万人)	標本数 (人)
ウルムチ市	天山区	193	2,537
	沙 区		1,801
トルファン地区	トルファン市	26	1,372
	トクスン県	11	360
イリ地区	イリ市	43	1,518
	イリ県	38	1,311
ホータン地区	ホータン市	28	266
	カラカシュー県	47	307
	グマ県	24	320
	ロブ県	22	241
	チラ県	14	258
	ケリヤ県	23	598
	ニヤ県	4	320
計		473	11,209

注：「新疆統計年鑑」(2007)より作成。市は都市地域、県は郡部。ウルムチ市の人口は総人口

十分に蓄積されていない。そこで、本研究では、新疆ウイグル自治区を代表するサンプルを抽出するために、民族構成と地域的性格（都市的か農村的か）、経済的差異等から、以下のような方法で調査対象地域を選定した（表1）。

区都ウルムチに関しては8つの行政区から乱数を用いて天山区と沙区を抽出した。トルファンは歴史が古い地域で、ウイグル族が75%を占めている。ここには、トルファン市とトクスン県、ピチャン市がある。この3地域の中から乱数を用いてトルファン市とトクスン県を抽出した。

イリカザフ族自治州はカザフ族の副省級自治州であり、民族構成はカザフ族が25.5%、漢族が45.2%、ウイグル族が15.9%を占め、総人口は411万人である。ここには2つの市と8つの県がある。これらの中から乱数を用いてイリ市とイリ県を抽出した。ホータン地区には1つの市と8つの県がある。ホータン地区の場合は、県間の経済的差異や民族構成の違いが他地域に比べて大きいことから、1市6県を、乱数を用いて抽出した。

以上のようにして抽出した13地域において、各地域の高等学校を1～3校を乱数を用いて抽出し、それらの高校を通じて調査を依頼した。調査に当たっては、新疆ウイグル自治区ウルムチ市教育局、トクスン県教育局、トルファン地区教育局、イリ地区教育局、ホータン地区教育局の全面的な協力を得た。なお、ウルムチの2つの区とトルファン市、トクスン県、イリ市、イリ県に関しては、その地域の教育局の意向に従って、それぞれの地域におけるすべての高校を対象にした。その結果、配票数は

18,070 になった。

(2) 調査の方法

抽出された高校の2年生の祖父母世代と親世代を調査対象者にした自記式留め置き調査を行った。こうした方法を採用したのは次のような理由からである。一つは利用可能なサンプリング台帳がなかったことと、二つには自記式調査票に関わる問題からである。『中国人類発展報告』(2005)によると、2000年に行われた調査では、新疆ウイグル自治区の成人で学校教育を受けたことのある割合は62%にとどまっており、高齢者世代では識字率がかなり低いことが推察される。そのため、祖父母世代が対象者となる場合、自記式調査では調査に回答することを敬遠する人や調査に回答できない人が多くなる。そこで、子どもまたは孫に当たる高校2年生が質問票に従って祖父母や親に対して聴き取り調査をすることを依頼した。その際、高校生には次のようにして回答者を1人に限定するように依頼した。まず、高校生が聞き取る対象者を性別・年代別で区別し、その優先順を、男子は、祖父→祖母→父→母、女子は、祖母→祖父→母→父の順にした。両親より祖父母を優先することで高齢者の回答者を少しでも多くするとともに、また祖父母がいない場合には中年層である両親を回答者とすることですべての高校生が必ず一人の回答者を得ることになる。そして、男女で祖父母または両親のうち同性の対象者を優先することにより、対象者の優先順位を明確にするとともに、対象者の性別の偏りをなくすようにした。

以上のような手順で回収したサンプルは11,327であり、そのうち有効サンプルは11,209である。性別は男性5,250人(46.8%)、女性5,959人(53.2%)で、年齢は最小が36歳、最大が89歳で、平均は54.1歳、標準偏差は14.2歳である。ちなみに、5歳階級別では、36～39歳317人(2.8%)、40代6,375人(56.9%)、50代1,307人(11.7%)、60代1,096人(9.8%)、70代1,076人(9.6%)、80代1,038人(9.3%)と50代が少なめで高齢世代が多めになっている。これは、既に述べたように、高齢世代のサンプルを確保するために両親よりも祖父母世代を優先したためであるが、結果的には各世代を層と見なした場合の層ごとの必要サンプル数を満たすことになった。

(3) 分析の方法

まず、各項目の頻度分布を確認し、データの傾向を見る。次に、日常的コンピテンスとして取り上げた、128項目を集約、類型化することを目的に、128項目全てに回答した完全回答票9,519票(男4,484、女5,035)を用いて、「自分にピッタリ当てはまる」に4点、「自分にだいたい当てはまる」に3点、「自分にはあまり当てはまらない」に2点、「自分には全然当てはまらない」に1点を与えて、主成分分析を行っ

た。そして、その結果を基に、サードエイジャーの日常的コンピテンスの種々の尺度の信頼性分析を行い、サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造を明らかにした。なお、本研究で分析に使用したソフトは、IBM SPSS Statistics 25 である。

Ⅲ. 結 果

(1) 頻度分布

サードエイジャーの日常的コンピテンスの測定項目として取り上げた 128 項目に関する 10,626 票の回答の頻度分布を図 1～図 5 に示す。これらの図は、「自分にピッタリ当てはまる」の選択率と「自分に大体当てはまる」の選択率と「自分に大体当てはまる」の選択率の合計が大きい順に並べなおしたものである。

上位 11 項目の選択率が 65% を超えており、これらは大多数のサードエイジャーに共通する日常的コンピテンスに関わる項目であると言える。それを順にあげると、「思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ」^{がんじょう}、「病気になりにくい頑丈な

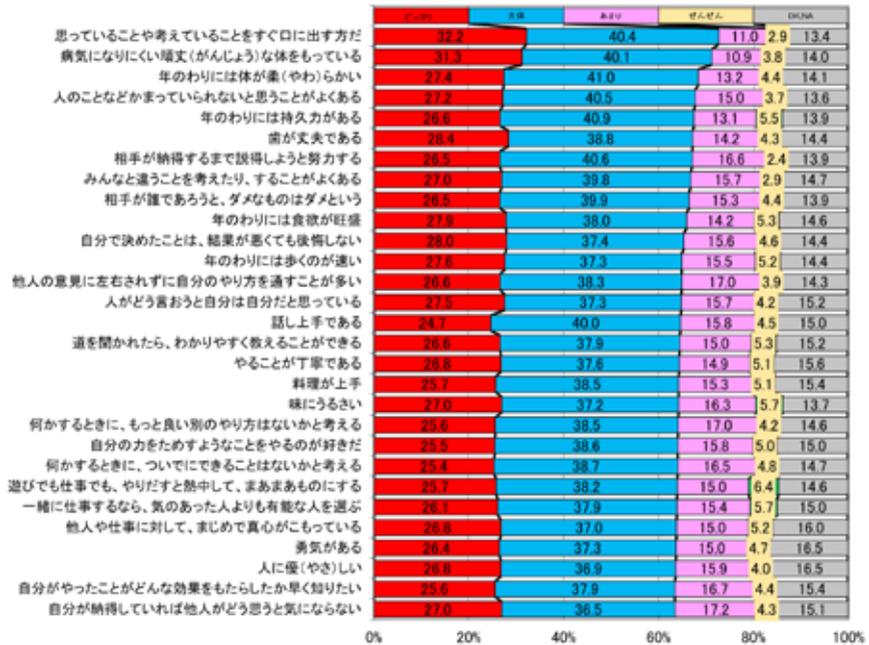


図 1：サードエイジャーの日常的コンピテンスの頻度分布（その 1）

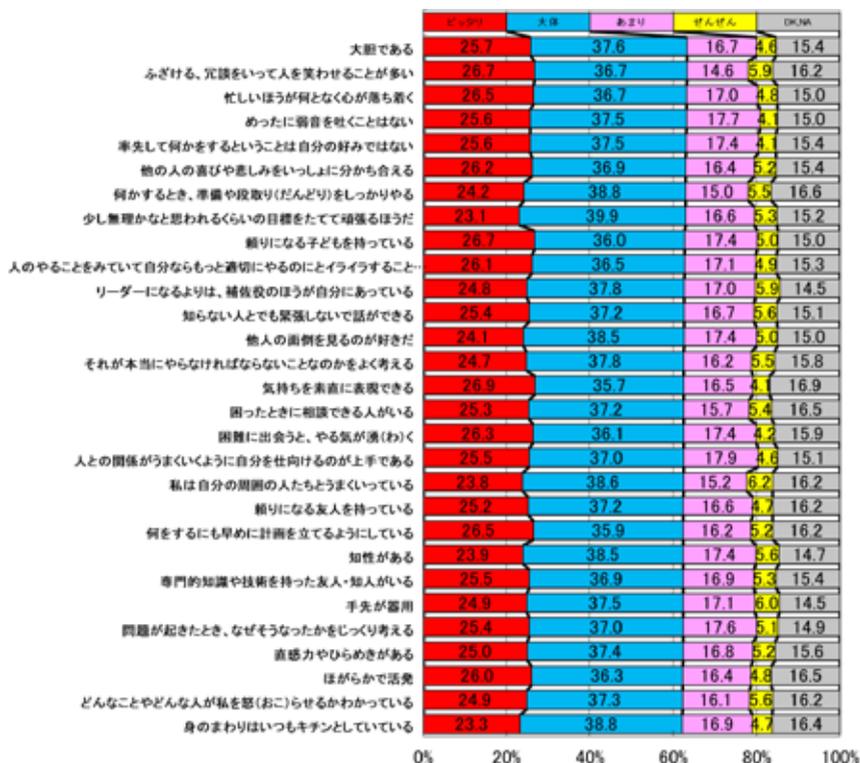


図2：サードエイジャーの日常的コンピテンスの頻度分布（その2）

体をもっている」、「年のわりには体が柔らかい」、「人のことなどかまっていられないと思うことがよくある」、「年のわりには持久力がある」、「歯が丈夫である」、「相手が納得するまで説得しようと努力する」、「みんなと違うことを考える、することがよくある」、「相手が誰であろうと、ダメなものはダメという」、「年のわりには食欲が旺盛」、「自分で決めたことは、結果が悪くても後悔しない」である。

中でも、「思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ」、「病気になるにくい頑丈な体をもっている」という項目に関して、30%以上のサードエイジャーが「自分にピッタリ当てはまる」と答えている。また、「歯が丈夫である」、「自分で決めたことは、結果が悪くても後悔しない」、「年のわりには食欲が旺盛」、「年のわりには歩くのが速い」、「人がどう言おうと自分は自分だと思っている」、「年のわりには体が柔らかい」、「人のことなどかまっていられないと思うことがよくある」、「自制心が強

サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造

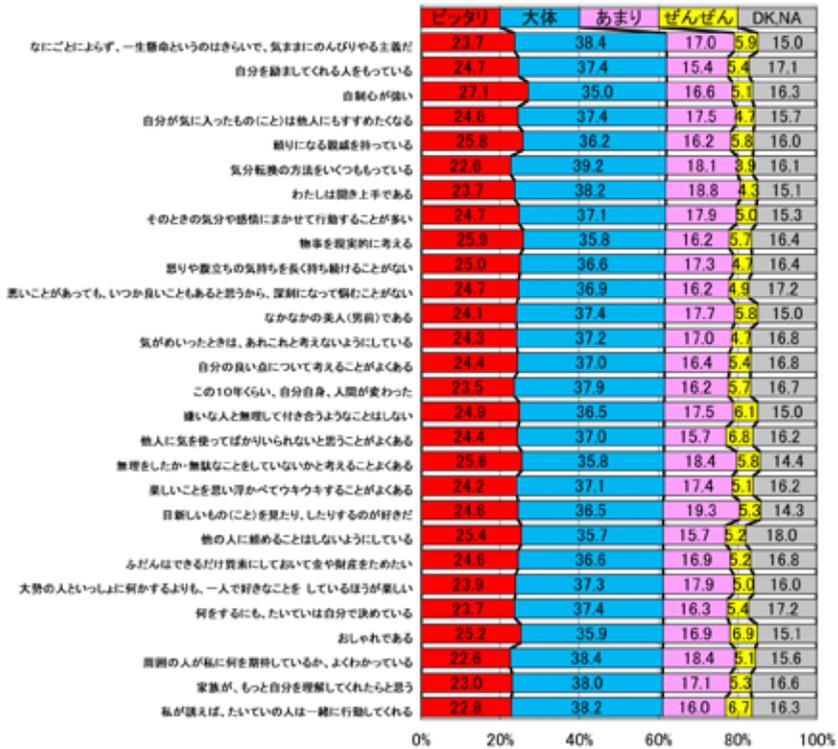


図3：サードエイジャーの日常的コンピテンスの頻度分布（その3）

い、「味にうるさい」、「自分が納得していれば他人がどう思うと気にならない」、「みんなと違うことを考える、することがよくある」、「気持ちを素直に表現できる」、「他人や仕事に対して、まじめで真心がこもっている」、「やることが丁寧である」、「人に優しい」、「頼りになる子どもを持っている」、「ふざける、冗談をいって人を笑わせることが多い」、「道を聞かれたら、わかりやすく教えることができる」、「他人の意見に左右されずに自分のやり方を通すことが多い」、「年のわりには持久力がある」、「相手が納得するまで説得しようと努力する」、「相手が誰であろうと、ダメなものはダメという」、「忙しいほうが何となく心が落ち着く」、「何をするにも早めに計画を立てるようになっている」、「勇気がある」、「困難に出会うと、やる気が湧く」、「他の人の喜びや悲しみをいっしょに分かち合える」、「人のやることをみている自分ならもっと適切にやるのにとイライラすることがある」、「一緒に仕事するなら、気の合った人よりも、

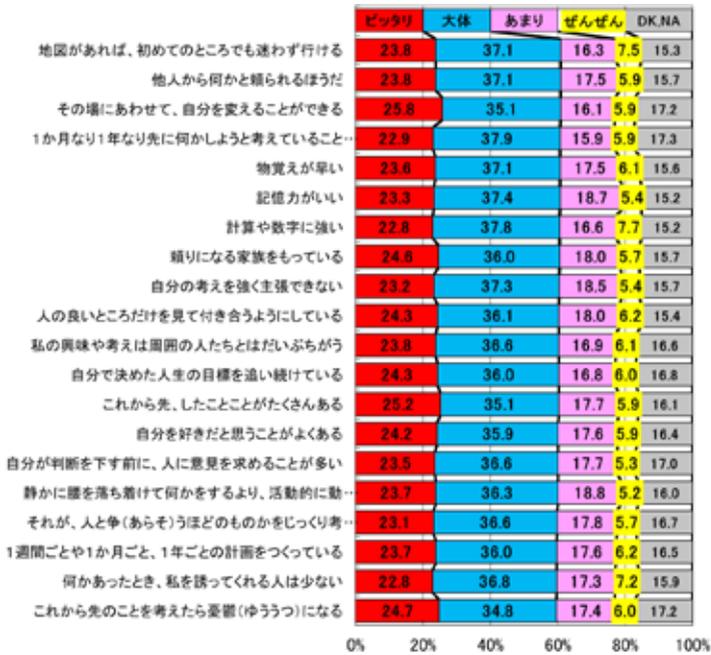


図4：サードエイジャーの日常的コンピテンスの頻度分布（その4）

有能な人を選ぶ」、「ほかからで活発」、「物事を現実的に考える」、「頼りになる親戚を持っている」、「その場にあわせて、自分を変えることができる」、「遊びでも仕事でも、やりだすと熱中して、まあまあものにする」、「遊びでも仕事でも、やりだすと熱中して、まあまあものにする」、「大胆である」、「料理が上手」、「率先して何かをするということは自分の好みではない」、「何かするときに、もっと良い別のやり方はないかと考える」、「めったに弱音を吐くことはない」、「自分がやったことがどんな効果をもたらしたか早く知りたい」、「無理をしたか・無駄なことをしていないかと考えることよくある」、「自分の力をためすようなことをやるのが好きだ」、「専門的知識や技術を持った友人・知人がいる」、「人との関係がうまくいくように自分を仕向けるのが上手である」、「問題が起きたとき、なぜそうなったかをじっくり考える」、「他の人に頼めることはしないようにしている」、「知らない人とでも緊張しないで話ができる」、「何かするときに、ついでにできることはないかと考える」、「困ったときに、相談できる人がいる」、「頼りになる友人を持っている」、「おしゃれである」、「これから先、したことがたくさんある」、「怒りや腹立ちの気持ちを長く持ち続けることがない」、

サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造

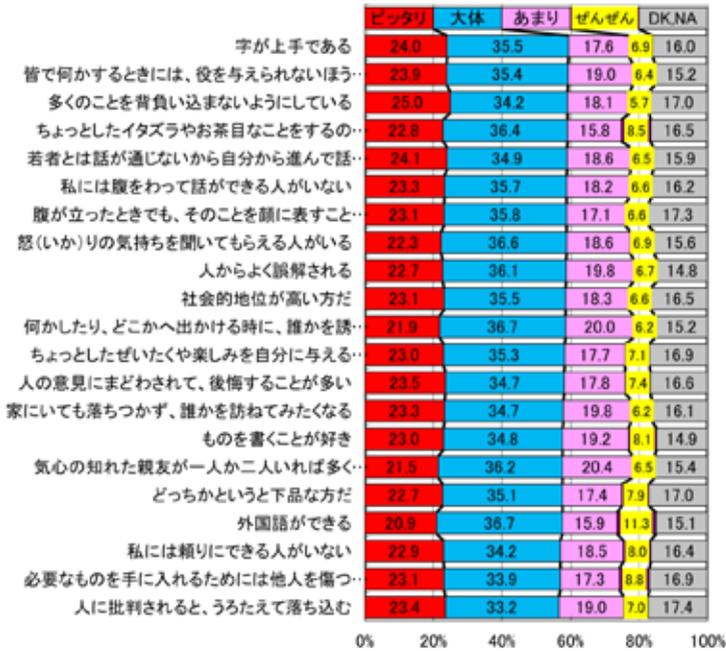


図5：サードエイジャーの日常的コンピテンスの頻度分布（その5）

「多くのことを背負い込まないようにしている」等の項目に関しては、25%以上のサードエイジャーが自分にピッタリ当てはまると答えている。

逆に25%以上のサードエイジャーが「自分にはあまり当てはまらない」あるいは「自分には全然当てはまらない」と答えた項目は、「ものを書くことが好き」、「外国語ができる」、「気心の知れた親友が一人か二人いれば多くの友人はいらない」、「私には頼りにできる人がいない」、「人からよく誤解される」、「何かをしたり、どこかへ出かける時に、誰かを誘うことが多い」、「必要なものを手に入れるためには他人を傷つけることもある」、「人に批判されると、うろたえて落ち込む」、「家にも落ちつかず、誰かを訪ねてみたくなる」、「怒りの気持ちを聞いてもらえる人がいる」、「皆で何かするときには、役を与えられないほうがよい」、「どっちかという下品な方だ」、「人の意見にまどわされて、後悔することが多い」、「若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない」の14項目である。

個々の項目に関する以上の結果を詳細に検討することも興味あるところであるが、

次にそれら 128 項目を整理・集約するために、回答を得点化して主成分分析を行い、その結果を参考にサードエイジャーの日常的コンピテンスの構造を明らかにし^{注4}、サードエイジャーの日常的コンピテンスの測定尺度を構成要因の解明を試みることにする。

(2) サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造

「自分にピッタリ当てはまる」に 4 点、「自分に大体当てはまる」に 3 点、「自分にあまり当てはまらない」に 2 点、「自分には全然当てはまらない」に 1 点を与えて、主成分分析を行った結果、固有値が 1 以上の主成分が 16 個出力された (表2)。第 1 主成分の寄与率 (全変数の分散の合計に対して、その主成分によって説明される分散の割合) が 37.87% であり、それ以外の主成分の寄与率はいずれも小さいが、累積寄与率 (寄与率の合計=説明された分散の合計) は 66.3% であり、全ての項目が比較的明瞭に各主成分に振り分けられている (表3~5)。なお、各主成分を構成する項目はその項目で最も大きい因子負荷量のものである。

第 1 主成分は、「頼りになる子どもをもっている」、「頼りになる友人をもっている」、「頼りになる家族をもっている」、「頼りになる親戚をもっている」、「専門的知識や技術を持った友人・知人がいる」、「困ったときに相談できる人がいる」がいる等の良好な人的資源をもっていることを表す内容の 6 項目と「他人の喜びや悲しみを一緒に分かち合える」、「気持ちを正直に表現できる」、「社会的地位が高いほうだ」、「朗らかで活発」、「勇気がある」等の良好な人間関係を維持できるだけの能力やスキルを表す 11 項目で構成されている。良好な人的資源をもっていることと良好な人間関係を維持できるだけスキルがあることを「リレーションシップ」としてまとめることができると考え、「リレーションシップ」と命名した。

第 2 主成分は、「物覚えが速い」、「外国語ができる」、「知性がある」等々の知的活に関する能力またはスキルとまとめることができる 14 項目から構成されており、「知的能力」と命名した。

表 2：サードエイジャーの日常的コンピテンスの主成分の固有値と寄与率

主成分	1	2	3	4	5	6	7	8
固有値	48.09	7.62	4.23	3.33	2.79	2.40	2.20	1.85
寄与率(%)	37.87	6.00	3.33	2.62	2.20	1.89	1.73	1.46
主成分	9	10	11	12	13	14	15	16
固有値	1.69	1.59	1.44	1.33	1.23	1.21	1.14	1.07
寄与率(%)	1.33	1.25	1.14	1.05	0.97	0.96	0.89	0.84

第3主成分は、「腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない」、「自分で決めた人生の目標を追い続けている」、「どんなことやどんな人が私を怒らせるかわかっている」、「人の意見にまどわされて、後悔する」等の「セルフコントロールスキル」としてまとめることができる9項目から構成されているため、「**セルフコントロール**」と命名した。

第4主成分は、「一緒に仕事するなら、気のあった人よりも有能な人を選ぶ」、「なにごとによらず、一生懸命というのはきらいで、気ままにのんびりやる主義だ」、「人のやることをみていて自分ならもっと適切にやるのにとイライラすることがある」、「皆で何かするときには、役を与えられないほうがよい」、「リーダーになるよりは、補佐役のほうが自分にあっている」というような11項目からなっており、マイペースな性格若しくはマイペースな人の行動特徴」としてまとめることができるので、「**マイペース**」と命名した。

第5主成分は、「何かするときに、ついでにできることはないかと考える」、「問題が起きたとき、なぜそうなったかをじっくり考える」、「何かするときに、もっと良い別のやり方はないかと考える」、「無理をしたり、無駄なことをしていないかと考えることよくある」等の「考える力もしくは思考力」としてまとめることができるような4項目と、「自分の力をためすようなことをやるのが好きだ」、「そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い」、「若者とは話を通じないから自分から進んで話をしようとは思わない」、「人との関係がうまくいくように自分を仕向けるのが上手である」等の「気分屋」としてまとめることができるような5項目から構成されている。「何かするときに、ついでにできることはないかと考える」、「問題が起きたとき、なぜそうなったかをじっくり考える」、「何かするときに、もっと良い別のやり方はないかと考える」などは一見するとよく考えて行動するコンピテンスに見えるが、「考えるのもその時の気分次第の文が大きいと解釈できるため、その時の気分によって左右される・左右されて行動する」「気分屋」の行動の特徴である部分が多いので、その時の気分によって行動や考えが変化する「**気分屋**」をより相応しいものとして採用した。

表3: サードエイジャーの日常的コンピテンスの主成分行列 (その1)

主成分		平均値	標準	因子	共通性
			偏差	負荷	
リレーションシップ	頼りになる子どもを持っている	2.994	0.821	0.893	0.664
	頼りになる友人を持っている	2.990	0.801	0.843	0.676
	頼りになる家族をもっている	2.943	0.829	0.840	0.662
	頼りになる親戚を持っている	2.975	0.830	0.826	0.675
	専門的知識や技術を持った友人・知人がいる	2.977	0.818	0.823	0.684
	他の人の喜びや悲しみをいっしょに分ち合える	2.993	0.817	0.777	0.663
	困ったときに相談できる人がいる	2.987	0.811	0.744	0.661
	他人や仕事に対して、まじめで真心がこもっている	3.017	0.813	0.726	0.672
	気持ちを素直に表現できる	3.026	0.793	0.690	0.671
	人に優(やさ)しい	3.035	0.786	0.656	0.691
	その場にあわせて、自分を変えることができる	2.975	0.831	0.638	0.690
	社会的地位が高い方だ	2.900	0.841	0.636	0.628
	ほがらかで活発	2.999	0.807	0.619	0.695
	物事を現実的に考える	2.981	0.827	0.568	0.710
勇気がある	3.023	0.798	0.517	0.655	
やることが丁寧である	3.020	0.808	0.512	0.703	
自制心が強い	3.004	0.821	0.511	0.683	
知的能力	物覚えが早い	2.927	0.830	0.826	0.670
	記憶力がいい	2.926	0.817	0.803	0.678
	知性がある	2.945	0.817	0.777	0.655
	外国語ができる	2.792	0.910	0.773	0.718
	ものを書くことが好き	2.854	0.876	0.766	0.664
	なかなかの美人(男前)である	2.938	0.826	0.754	0.654
	直感力やひらめきがある	2.973	0.813	0.753	0.657
	計算や数字に強い	2.892	0.853	0.740	0.703
	おしゃべりである	2.936	0.855	0.694	0.645
	地図があれば、初めてのところでも迷わず行ける	2.911	0.856	0.688	0.711
	手先が器用	2.951	0.832	0.668	0.645
	字が上手である	2.911	0.851	0.625	0.702
	味にうるさい	2.990	0.836	0.510	0.623
	知らない人でも緊張しないで話ができる	2.970	0.825	0.421	0.651
この10年くらい、自分自身、人間が変わった	2.951	0.811	0.818	0.705	
腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない	2.912	0.835	0.805	0.714	
自分で決めた人生の目標を追い続けている	2.946	0.828	0.804	0.704	
どんなことやどんな人が私を怒(おこ)らせるかわかっている	2.972	0.816	0.764	0.698	
人の意見にまどわされて、後悔することが多い	2.891	0.858	0.689	0.675	
怒(いか)りの気持ちを聞いてもらえる人がいる	2.880	0.842	0.677	0.651	
それが、人と争(あらそ)うほどのものかをじっくり考える	2.926	0.818	0.629	0.615	
怒りや腹立ちの気持ちを長く持ち続けることがない	2.981	0.802	0.556	0.591	
人に批判されると、うろたえて落ち込む	2.883	0.856	0.547	0.662	
率先して何かをするということは自分の好みではない	3.001	0.791	0.786	0.646	
自分がやったことがどんな効果をもたらしたか早く知りたい	3.000	0.796	0.757	0.659	
忙しいほうが何となく心が落ち着く	2.999	0.813	0.729	0.642	
一緒に仕事するなら、気のあった人よりも有能な人を選ぶ	2.993	0.822	0.699	0.629	
なににごとによらず、一生懸命というのはきらいで、気ままにのんびりやる主義だ	2.939	0.823	0.694	0.652	
人のやることをみていて自分ならもっと適切にやるのにとイライラすることがある	2.991	0.814	0.669	0.626	
誰で何かするときには、役を与えられないほうがよい	2.905	0.846	0.595	0.657	
めったに弱音を吐くことはない	2.996	0.795	0.591	0.621	
リーダーになるよりは、補佐役のほうが自分にあっている	2.954	0.829	0.499	0.567	
困難に出会うと、やる気が湧(わ)く	3.006	0.800	0.447	0.630	
少し無恥かなと思われるくらいの目標をたてて頑張るほうだ	2.951	0.801	0.410	0.597	

表5：サードエイジャーの日常的コンピテンスの主成分行列（その3）

主成分		平均値	標準 誤差	因子	
				因子 負荷量	共通性
孤独不安	私には頼りにできる人がいない	2.861	0.871	0.757	0.691
	私には話をわかって話ができる人がいない	2.902	0.842	0.709	0.697
	何かあったとき、私を助けてくれる人は少ない	2.894	0.848	0.694	0.653
	私が誘えば、たいていの人は一線に行動してくれる	2.821	0.829	0.580	0.647
世話好き	私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう	2.936	0.828	0.552	0.669
	家族が、もっと自分を理解してくれたらと思う	2.945	0.802	0.496	0.618
	他人の面倒を見るのが好きだ	2.860	0.805	0.805	0.683
	自分が気に入ったもの(こと)は他人にもすすめてくなる	2.972	0.801	0.778	0.689
リスク回避	静かに腰を落ち着けて何かをするより、活動的に動き回るほうが自分に合っている	2.937	0.814	0.728	0.664
	他人から何かと頼られるほうだ	2.935	0.825	0.679	0.644
	周囲の人が私に何を期待しているか、よくわかっている	2.930	0.801	0.627	0.628
	私は自分の周囲の人たちとうまくいっている	2.955	0.819	0.472	0.689
アイデンティティ	ふだんはできるだけ質素にしておいて金や財産をためたい	2.967	0.810	0.710	0.716
	何をするにも、たいていは自分で決めている	2.959	0.805	0.703	0.711
	自分が判断を下す前に、人に意見を求めることが多い	2.943	0.809	0.702	0.689
	これから先、したいことがたくさんある	2.948	0.836	0.533	0.685
会話力	身のまわりはいつもキチンとできている	2.965	0.787	0.516	0.689
	自分の考えを強く主張できない	2.930	0.813	0.512	0.669
	人がどう言おうと自分は自分だと思っている	3.040	0.795	0.697	0.674
	他人の意見に左右されずに自分のやり方を通すことが多い	3.022	0.789	0.666	0.681
計画力	自分で決めたことは、結果が悪くても後悔しない	3.037	0.807	0.655	0.653
	遊びでも仕事でも、やりだすと熱中して、まあまあものにする	2.976	0.836	0.615	0.641
	自分が納得していれば他人がどう思うかと気にならない	3.015	0.803	0.475	0.641
	大胆である	2.999	0.801	0.507	0.662
共通性	話し上手である	2.997	0.786	0.461	0.584
	誰を聞かれたら、わかりやすく教えることができる	3.012	0.814	0.456	0.649

注：日常的コンピテンスの縮約方法：主成分分析。回転法：回転法；Kaiserの正規化を伴うプロマックス法、共通性は回転後の数値。26回の反復で回転が収束した。

第6主成分は、「それが本当にやらなければならないことなのかをよく考える」、「他の人に頼めることはしないようにしている」、「何をするにも早めに計画を立てるようにしている」、「何かするとき、準備や段取りをしっかりとやる」などの6項目から構成されており、社会人基礎力である計画力を表す行動若しくはスキルに関する項目内容であることから、「計画力」と命名した。

第7主成分は、「ふざけたり、冗談をいって人を笑わせることが多い」、「多くのことを背負い込まないようにしている」、「楽しいことを思い浮かべてウキウキすることがよくある」、「気がめいったときは、あれこれと考えないようにしている」、「気分転換の方法をいくつも持っている」等の物事の行き先を良い方に考えたり、心配するほ

どの事態でもないものとして気楽に考えて行動できるスキルもしくはそのようなスキルを持っている人の性格特徴としてまとめることができる8項目から構成されており、「**楽観力**」と命名した。

第8主成分は、「ちょっとしたイタズラやお茶目なことをするのが楽しい」、「必要なものを手に入れるためには他人を傷つけることもある」、「ちょっとしたぜいたくや楽しみを自分に与えることがよくある」、「自分を好きだと思えることがよくある」、「自分の良い点について考えることがよくある」等の7項目から構成されており、「**楽しみ上手**」と命名した。

第9主成分は、「年のわりには体が柔らかい」、「年のわりには歩くのが速い」、「年のわりには持久力がある」、「歯が丈夫である」、「病気になるにくい頑丈な体をもっている」、「年のわりには食欲が旺盛」、「料理が上手」等の健康状態や身体的若さとも言えるような7項目から構成されているため、「**健康力**」という成分名を採択した。

第10主成分は、「みんなと違うことを考える、することがよくある」、「相手が納得するまで説得しようと努力する」、「思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ」、「相手が誰であろうと、ダメなものはダメという」、「人のことなどかまっていられないと思えることがよくある」等の5項目からなっており、これらの項目の内容は、自分の意見や考え、欲求などを他人に伝える、言いたいことを言う「**自己主張**」そのものであると解釈できるため、「**自己主張**」と命名した。

第11主成分は、「何かをしたり、どこかへ出かける時に、誰かを誘うことが多い」、「人の良いところだけを見て付き合うようにしている」、「家にも落ちつかず、誰かを訪ねてみたくなる」、「わたしは聞き上手である」等の積極的な人間関係と行動を表すような4項目と、「大勢の人といっしょに何かするよりも、一人で好きなことをしているほうが楽しい」、「嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない」、「気心の知れた親友が一人か二人いれば多くの友人はいらない」、「人からよく誤解される」等の4項目から構成されている。「わたしは聞き上手である」と「人からよく誤解される」を除くと、「**選択的人間関係スキル**」とも解釈できるが、つきも離れもしない関係をもつからこそ、聞き上手でありながら、人からよく誤解されることがある点を加えると、人との関係について、いつも適度な距離を保つ行動やそのスキルまたは特性を表す内容の項目群であると解釈する方がより妥当であるため、「**不即不離**」と命名した。

第12主成分は、「私には頼りにできる人がいない」、「私には腹をわって話ができる人がいない」、「何かあったとき、私を誘ってくれる人は少ない」等の人的支援資源がないことを表す内容の3項目と、「私が誘えば、たいいていの人と一緒に行動してくれ

る」、「私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう」、「家族が、もっと自分を理解してくれたらと思う」という 3 項目からなっており、小田の事例研究における「孤独不安」の因子モデルと同じ内容になっているため、本研究でも「**孤独不安**」の主成分であると解釈した。

第 13 主成分を構成しているのは、「他人の面倒を見るのが好きだ」、「自分が気に入ったもの(こと)は他人にもすすめてくなる」、「静かに腰を落ち着けて何かをするより、活動的に動き回るほうが自分に合っている」、「他人から何かと頼られるほうだ」、「周囲の人が私に何を期待しているか、よくわかっている」、「私は自分の周囲の人たちとうまくいっている」等人の面倒を見流のが好きな人の特徴を示す内容の 6 項目であり、「**世話好き**」と命名した。

第 14 主成分は、「ふだんはできるだけ質素にしておいて金や財産をためたい」、「何をするにも、たいていは自分で決めている」、「自分が判断を下す前に、人に意見を求めることが多い」、「これから先、したいことがたくさんある」等の将来に備える行動やスキルとしてまとめることができる 4 項目と、「身のまわりはいつもキチンとしていている」と「自分の考えを強く主張できない」という「**リスク回避**」コンピテンスに関する 2 項目から構成されている。将来の為に備えること自体も一種類のリスク回避方法である、もしくはリスク回避そのものであると解釈できるため、第 14 主成分を「**リスク回避**」と命名した。

第 15 主成分を構成しているのは「人がどう言おうと自分は自分だと思っている」、「他人の意見に左右されずに自分のやり方を通すことが多い」、「自分で決めたことは、結果が悪くても後悔しない」、「遊びでも仕事でも、やりだすと熱中して、まあまあものにする」、「自分が納得していれば他人がどう思うと気にならない」等の自分は自分、他人は他人という意味での 5 項目である。これらの項目の内容は心理学や社会学において、ある者が何者であるかについて他の者から区別する概念、信念、品質及びその表現を表す「**アイデンティティ**」の内容と一致していることから、「**アイデンティティ**」という主成分名を採択した。

第 16 主成分を「大胆である」、「話し上手である」、「道を聞かれたら、わかりやすく教えることができる」という 3 項目が構成している、一見すると特徴がないように見えるが、大胆であるのも、道を聞かれたら、わかりやすく教えることができるのも、そして、話し上手であるのも、「**会話力**」があるからであると解釈できるため、「**会話力**」と命名した。

各主成分の寄与率(取り上げた変数の数÷固有値)にみるように、第一主成分の寄与率が 37.87% で、大きな固有値を示しており、全体の情報量の 37.87% を説明している

ことがわかる。ただし、その他の主成分の固有値も低くないので、それらすべての主成分を用いて説明することの利点が多いと思われる。また、全体で元の情報の約 63.3% が説明されている。言い換えると、全体の説明力から言えば、満足のものであると言える。

また、「KMO および Bartlett の検定」の表は、扱っている標本（サンプル）が因子分析に適しているかどうかを検定した結果である。Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度（Kaiser-Meyer-Olkin Measure of Sampling Adequacy: KMO）は、因子分析や主成分分析をしても有用な結果は得られないことを示す。1 に近いほど、標本の妥当性が高く、0.8 以上であれば、因子分析をする価値が十分にある標本と判断され、0.9 以上であれば、文句なし、ということになる。一般的には、0.7 以上が望ましいとされている。この主成分分析の Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度が 0.979 と非常に高くなっているため、因子分析や主成分分析に十分適していると言える。また、Bartlett の球面性検定（Bartlett's Test of Sphericity）の近似カイ 2 乗値の数値は、変数間に相関がないという帰無仮説を検定した結果で、一般的に、その帰無仮説が 5% 水準で棄却できれば、標本はその主成分分析に適合していると判断される。今回行った主成分分析の有意確率は 0.000 であるため、帰無仮説を棄却することができる。上記のような検定結果から、この論文で扱った標本に対して主成分分析は、不都合はないという結論になる。言い換えると、取り上げた標本は主成分分析に適しているといえる。したがって、127 種類の日常的コンピテンスを 16 の類型に縮約してサードエイジャーの日常的コンピテンスを分析する時の利点は大きい。そこで、以下において、信頼性分析による日常的コンピテンスモデルの検討を行う。

表 6：KMO および Bartlett の検定

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		0.979
Bartlett の球面性検定	近似カイ 2 乗	903337.175
	自由度	8001
	有意確率	0.000

(3) 日常的コンピテンスを構成する尺度の信頼性

一般的に、サンプルの規模が 1,000 を超すほど大きいときにはカイ 2 乗値をモデルの適合度指標として採用することは適切ではない（小田, 2004; シャザディグリ, 2014）とされている。モデルを検討するときによく用いられているのは共分散構造分析で得られる RMR（残差平方平均平方根）、GFI（Goodness-of-Fit Index）、AGFI（調整済み GFI）、NFI（基準化適合度指標）、RMSEA（平均 2 乗誤差平方根）からモデルの適合度を判定する場合

もあれば、信頼性係数を算出して検討する場合もある。また、モデルの適合度が良好であっても、モデルを構成している項目を用いて作成される尺度の信頼性係数 α が高いというわけではないし、 α 値が大きければモデルの適合度も高くなるというわけではない。モデルの適合度と尺度の信頼性のいずれを優先するかは機械的に決められるものではなくて目的に応じて異なる。そこで、以上のようなことを念頭において、新疆ウイグル自治区におけるサードエイジャーの日常的コンピテンスを集約することを目的に抽出された因子に関して、それらを構成する項目の合成得点を日常的コンピテンスの測定尺度とした場合の信頼性（内部一貫性）を検討するために、信頼性分析を行い、信頼性係数（クロンバックの α ）を算出した。

表7：サードエイジャーの日常的コンピテンス尺度の各主成分の信頼性係数一覧

主成分	リレーション シップ	知的能力	セルフコント ロール	マイペース	気分屋	計画力	牽制力	楽しみ上手
クロンバックの α	0.942	0.953	0.938	0.932	0.918	0.922	0.927	0.925
主成分	健康力	自己主張力	不和不離	孤独不安	世話好き	リスク回避	アイデンティ ティ	会話力
クロンバックの α	0.917	0.955	0.915	0.897	0.982	0.914	0.919	0.837

信頼性分析を行った場合、一般的に、モデルごとに、各モデルの信頼性係数とそのモデルに属する項目を記すだけではなく、モデルごとに、ある項目が削除された場合に元の項目群による尺度よりも α が大きくなる場合には、削除項目と削除された場合の α を記すことが多く（小田、1997；尹徳挺、2007；章美娟、2007；呉燕ほか、2014、シャザディグリ、2014等々）、いくつかの尺度に関しては類似の尺度を複数作成し、それらのいずれを用いるかは、目的と測定の便宜に応じて決めればよいことになっている。他方、モデルの適合度が良好であっても、モデルを構成している項目を用いて作成される尺度の信頼性係数 α が高いというわけではないし、 α 値が大きければモデルの適合度も高くなるというわけではない。モデルの適合度と尺度の信頼性のいずれを優先するかは機械的に決められるものではなくて目的に応じて異なる。これらのことを前提に、本研究ではどのモデルに関しても、項目の削除などによるモデルの再検討を行っていない。また、当然のことながら、信頼性分析を行った際に使用した各測定尺度に属する項目も、上記の表2～6で主成分分析の結果として取り上げたものと全く同じものである。そのため、日常的コンピテンスに関する各測定尺度 α 値のみ一覧化したものを以下に記しておく。なお、すでに述べたように、各項目の選択肢「まったくそう思う」、「少しそう思う」、「あまりそう思わない」、「全然そう思わない」に、それぞれ4、3、2、1点を与え、その合計点を尺度の測定値とする。

一般的にクロンバックの α の値が 0.7 以上であれば信頼性の高い尺度とみなされるが、その値がどれくらいでなければならないかという絶対的な基準があるわけではない。 α の値は大きければ大きいほどよいことになるから、 α の値を高くしようとすれば、相関の高いものだけを集めればよい。しかし、そうしようとすれば、よく似たような項目ばかりになり、複数の項目で尺度を構成する意味も薄れてしまう。各測定尺度の信頼性係数がかなり高く、一番低いもので 0.837 となっており、似たもの同士を集めたわけでもなければ、意図的に項目の削除などを行ったわけでもないので、どのモデルも尺度としての信頼性が高いと言える。以上、主成分分析で得られた主成分を構成する項目の信頼性係数を上げしたが、尺度の有効性は一回限りの検定では判断しがたい。 α 係数の値も対象を替えることによって大きく変わることも考えられるが、ここに記した測定尺度は、サード・エイジにおいて経験する変化や新しい出来事に適切に対応し、充実したサード・エイジとサクセスフル・エイジングに必要とされるスキルであり、高齢者の継続雇用の基準について議論する際にも役立つものであると考える。

本研究では、以上取り上げたように、日常的コンピテンスモデルを構成する尺度として、16 の主成分を基に検討を行い、それらの尺度を、日常的コンピテンスを分析・検討する際の構成要素とした^{註5}。したがって、今後の研究において、サード・エイジャーの日常的コンピテンスをこれらの 16 個の尺度で測定することになるが、上述のように、それぞれは一見関連がないようなスキルでも、その人、その家族の固有の日常生活を成り立たせているスキルまたは潜在的な能力として総合的に密接な関連を持っていることがわかる。

IV. 結 び

本稿では、大規模なサンプル調査から得られた 128 の日常的コンピテンスに関するデータを分析し、サードエイジャーの日常的コンピテンスの一端を明らかにした。

高齢者は、高齢期における日常な生活課題に対して、どのような対応をしているか、或いはしようとしているか、そして、なぜそうした行動をとるのか、といったことを生活活動能力との関係を分析・検討する際にも、そのような生活活動能力の類型的な把握が必要になるだろう。よって、高齢化が進む中でサードエイジャーの日常的コンピテンスの構造とその測定尺度を明らかにすることは、高齢者がいかにして身体的、経済的、精神的自立を維持し、どのようにしたら長い老後生活を充実感・満足感を味わいながら送ることができるかというサクセスフル・エイジングの重要な課題であるだけでなく、高齢者の自立生活を支援する方策や高齢者の再雇用などを検討す

る際にも有用な道具になりうると思われる。

【注 1】ライフスキル (Life Skills) とは「日常生活に生じるさまざまな必要や問題に対して、より建設的かつ効果的に対処することを可能にする適応的で建設的行動能力」(世界保健機関、1997) である。よりよく生きるために必要な技術・能力、生活技能ともいう。そして、そのように定義されるライフスキルの最も重要な項目として、(1) 意思決定能力、(2) 問題解決能力、(3) 創造的思考、(4) 批判的思考、(5) 効果的なコミュニケーション能力、(6) 対人関係の構築と維持能力、(7) 自己認識、(8) 共感する能力、(9) 感情を制御する能力、(10) 緊張とストレスに対処する能力などがある (世界保健機関、1997)。

【注 2】リビングスキル (Living Skills) とは、より日常的な行為に関係する社会心理的なスキルのことであり、人生から最大限のものを引き出し、自分に降りかかる挑戦や困難に効果的に対応する為に必要なスキルである (Whcherley et al., 1994)。そして、リビングスキル (Living skills) は、日常的コンピテンスの尺度として用いられている ADL (Activities of Daily Living: 日常生活活動能力) 尺度と同様に (Mahurin et al., 1991)、あるいは IADL 尺度 (Instrumental Activities of Daily Living: 手段的生活活動能力) と同義に用いられることもある (Williams et al., 1991) が、料理やガーデニング、家庭管理と言った実用的なスキルを含まない。イギリスで発行され、グループ・ワークの手引書として評価の高い Living Skills II (Whcherley et al., 1994) はリビングスキル (Living skills) の意味しているところを詳細に上げた研究として注目される。

【注 3】この論文で扱った調査は、小田利勝先生 (現神戸大学名誉教授) のご指導によるものであり、心から深く感謝を申し上げます。また、本論文の査読の先生が筆者の日本語の不備も含め、大変綿密なコメントをしてくださり、色々な不備を修正することができました。そして、今後の課題としなければならない点も指摘していただき、大変感謝する次第です。

【注 4】主成分分析自体は、尺度になっていないが、尺度構成の前提として必要である。

【注 5】主成分分析を行った日常的コンピテンスに関する測定項目が小田 (2004) の研究で用いられた項目と同じものであるが、抽出された主成分は小田 (2004) の研究で抽出された因子と大きく異なるものになっている。それは、本研究で用いたデータは、サードエイジャーのデータであり、高齢者だけを対象にしているわけではないことによるかもしれない。このような点も含めて、一般化可能な尺度構成の分析を進めて行くことを今後の課題としたい。

【参考文献】

- Baltes, Margaret M., Ulrich Mayr, Markus Borchelt, Ineke Maas and Hans-Ulrich Wilms (1993) "Everyday Competence in Old and Very Old Age: An Inter-disciplinary Perspective", *Aging and Society*, 13: 657-680.
- Cornelius, S. W., & Caspi, A. (1987) Everyday problem solving in adulthood and old age. *Psychology and Aging*, 2 (2): 144-153.
- 陈静・张黎明・高莉 (2007) 「武汉市城区老年人日常生活能力及其影响因素研究」『中华老年医学杂志』 26(1): 63-64.

- 杜鹏・武超 (2006) 「中国老年人的生活自理能力状况与变化」、『人口研究』30(1): 50–56.
- Diehl M. (1998) “Everyday competence in later life: Current status and future directions”, *Gerontologist*, 38: 422–423.
- Dodge, H H, et al. (2005) “Cognitive impairment as a strong predictor of incident disability in specific ADL-IADL tasks among community-dwelling elders: the Azychi Study”, *Gerontologist*, 45: 222–230.
- Fillenbaum, G. G. (1985) “Screening the elderly: A brief instrumental activities of daily living measure. *Journal of the American Geriatrics Society*”, 33: 698–706.
- Guralnik, J. M., T.E. Seeman, M. E. Tinetti, M.C. Nevitt and L. F. Berkman (1994). “Validation and Use of Performance Measures of Functioning in a Non-Disabled Older Population: of Successful Aging”, *Aging Cli. Exp. Res.*, 6: 410–419.
- 古谷野亘 (1992) 「生活機能の自立性——その測定と分析」『第 65 回日本社会学会大会報告要旨』403–4.
- Gill, Thomas M., Emily D. Richardson and Mary E. Tinetti (1995) “Evaluating the Risk of Dependence in Activities of Daily Living Among Community-Living Older Adults With Mild to Moderate Cognitive Impairment”, *Journal of Gerontology: Medical Sciences*, 50A (5): M235–M241.
- 何燕玲・瞿光亚・熊祥玉 (1989) 「老人日常生活活动能力的评定」、『上海精神医学』3: 124–126.
- Hellmut Erzigkeit, Hartmut, Lehfeld, Jordi Pena-Casanova, Florian Bieber, et al. (2001) “Dementia and Geriatric Cognitive Disorders”, *Basel*, 12: 348.
- 平澤 則子・飯吉 令枝・鳩野 洋子・小林 恵子 (2011) 「山間豪雪地域における高齢者の IADL の変化と日常生活行動との関連性」、『Journal of Japan Academy of Community Health Nursing』13(2): 35–37.
- 黄伟・葛晓娇・侯赛 (2012) 「大别山区老年人日常生活活动能力及影响因素」、『中国公共卫生』28(7): 884–886.
- Jonghoon Park, Kazuko, Ishikawa-Takata, Shigeho Tanaka, et al. (2014) “The relationship of body composition to daily physical activity in free-living Japanese adult men”. *British Journal of Nutrition*, 2014, 111: 182–188.
- Kalisch, Tobias, Julia Richter, Melanie Lenz, Jan-Christoph, Kattenstroth, Izabela Kolankowska, Martin Tegenthoff, Hubert R Dinse (2011) “Questionnaire-based evaluation of everyday competence in older adults”, *Clinical Interventions in Aging*, 6: 37–46.
- Katz, S., et al. (1959) “Multidisciplinary studies of illness in aged persons II. a new classification of functional status in Activities of Daily Living, *J. Chron. Dis.*, 55–62.
- Katz, S., Ford, A. B, Moskowitz, R. W., Jackson, B. A, and Jaffe, M. W. (1963) “Studies of

- illness in the aged, the index of ADL: A Standardized Measure of Biological and psychosocial Function”, *Journal of the American Medical Association*, 185: 914–919.
- Katz S, Duwms TD, Cash HR, et al. (1970) “Progress in development of the index of ADL”, *Gerontologist*, 53: 20–30.
- Kyriaki M, Eleni T, Efi Parpa, et al. (2013) “Activities of daily living Greek cancer patients treated in a palliative care unit”. *Supportive Care in Cancer*, 21: 97–105.
- 李芸・吴琳娜・李俊海 (2012) 「成都市社区老年慢性病患者自理能力及关爱需求调查」、《四川大学学报 (医学版)》43(2): 218–221.
- Laslet, P. (1996) *A Fresh map of life* (Second edition), Macmillan Press, UK.
- Lawton, M. Powell and Elaine M. Brody (1969). “Assessment of Older People: Self-Maintaining and Instrumental Activities of Daily Living”, *Gerontologist*, 9: 179–85.
- Loewenstein DA, Amigo E, Duara R, Guterman A, Hurwitz D, Berkowitz N, et al. (1989) “A new scale for the assessment of functional status in Alzheimer’s disease and related disorders”. *Journal of Gerontology*. 44: 114–121.
- 李聪・张小丽・张盼 (2017) 「蚌埠市老年人日常生活能力现状及影响因素」、《中国公共卫生》33(6): 991–993.
- 溝川藍・子安増生 (2015) 「青年期・成人期における共感性、情動コンピテンスと道徳性の関連」、《教育心理学研究》65: 361–374.
- Mahurin, Roderick K., Barbara H. DeBettignies and Francis J. Pirozzolo (1991) “Structured Assessment of Independent Living Skills: Preliminary Report of a Performance Measure of Functional Abilities in Dementia”, *Journal of Gerontology*, 46(2): 58–66.
- 村田伸・大山美智江・村田潤・大田尾浩・豊田謙二・津田彰 (2010) 「地域在住高齢者の日常生活活動能力に関連する要因分析——性差の検討」、《行動医学研究》2010年、15(2): 52–60.
- 内閣府 (2019) 『高齢社会白書』、日経印刷。
- 長田由紀子・長田久雄 (1994) 「高齢者の回想と適応に関する研究」、《発達心理学研究》, 5(1): 1–10.
- 牛田华・孟庆妖・孟彦臻 (2010) 「农村老年人日常生活活动能力现状及影响因素」、《现代预防医学》, 37(7): 1290–1296.
- Osler M, de Groot LC, Enzi G (1991) “Life-style: physical activities and activities of daily living. Euronut SENECA investigators, *European Journal of Clinical Nutrition*, 01 Dec 1991, 45 Suppl 3: 139–151.
- 小田利勝・野上智行・浅田匡・小石寛文 (1997) 「サクセスフル・エイジングとライフスキルに関する一考察」『神戸大学発達科学部研究紀要』4(2): 363–374.
- 小田利勝 (1999) 「高齢期における自立生活と日常生活活動能力をめぐる」『神戸大学発達科学研究紀要』7(1): 201–222.

- (2003)、「サクセスフル・エイジングの概念と測定方法」、『人間科学研究』11(1): 17-38.
- (2004)『サクセスフル・エイジングの研究』、学文社.
- Rowe, John W. and Robert L. Kahn (1987) “Human Aging: Usual and Successful”, *Science*, 237: 143-149.
- Rowe, John W. and Robert L. Kahn (1997) “Successful Aging”: *Gerontologist*, 37(4): 433-440.
- (1998) *Successful Aging*: Dell Publishing.
- シャザディグリ シャウティ (2006)『高齢化社会とテレビ』(中国語)、新疆人民出版社.
- (2014)『マスコミ理論とライフスタイル——新疆ウイグル自治区における調査研究』、学文社.
- 吴炳义・李娟丽・刘文浩・王媛媛・王在翔 (2019)「生活方式对老年人日常活动能力影响」『中国公共卫生』35(7): 881-884.
- Willis, Sherry L., (1991) Cognition and Everyday Competence, In K. W. Schaie ed., *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, 11: 80-109.
- Willis, S. L. and Marsiske, M. (1993) *Manual for the Everyday Problems Test*. University Park, PA: The Pennsylvania State University.
- Willis, S. L. (1996) Assessing everyday competence in the cognitively challenged elderly. *Older Adults' Decision-Making and the Law*, 87-127.
- WHO (編) 川畑徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也 (監訳) (1997)『WHO ライフスキル教育プログラム』、大修館書店.
- Wycherley, Bob, Clare Crellin and Tony Chiva (1994) *Living Skills*, II, Outset Publishing, East Sussex, UK.
- 徐晓明・徐勇 (2010)「社区老年人日常生活能力及影响因素」、『中外医疗』10: 80-82.
- 许蕾丹・周小军・黄博抒・石璐・周海霞・康旭 (2019)「上饶市长期照护老年人日常生活能力现状调查及影响因素分析」、『中国循证医学杂志』19(2): 135-139.
- 徐小凤・陈茜・赵艺璞・胡秀英 (2018)「我国西部地区居家老年人生活自理能力调查分析」、『北京大学学报(医学版)』457-462.
- 尹德挺 (2007)『老年人日常生活自理能力的多层次研究』、中国人民大学出版社.
- 宋爱芹・郭立燕・梁亚军, 等 (2013)「农村老年人生活活动能力测评及影响因素分析」, 中华疾病控制杂志, 17(5): 451-453.
- 章美娟・周小军・袁兆康 (2007)「社区老年人日常生活能力评价与影响因素分析」、『中国全科医学』10(24): 2106-2108.
- 张文娟・李树苗・胡平 (2003)「农村老年人日常生活自理能力的性别差异研究」、『人口与经济』2003(4): 75-80.

庄晓伟·陈玉明·刘寒·李霞 (2012) 「老年人的心理健康与日常生活活动能力、社会支持的横断面调查研究」、『Chinese Journal of Rehabilitation Medicin』 32(10): 1162-1166.

Structure of Everyday Competence for the Third Ager:

Based on the Field Research in Xinjiang Uyghur Autonomous Region, China

by SHAZADIGUL SAWUT

The purpose of this study is to clarify the structure of daily competence of the third-ager. The research was conducted from May to June 2008 in Xinjiang Uyghur Autonomous Region, China and the effective responses were 11,209. The analysis of these data revealed scales that consist of everyday competence as following structural factors. (1) relationship, (2) intellectual power, (3) self-control or mood, (4) one's own pace, (5) moody personality, (6) planning ability, (7) optimism, (8) good way to enjoy, (9) health, (10) self-assertion, (11) neutral (non-committal) attitude, (12) loneliness-anxiety, (13) loving care, (14) risk aversion, (15) identity, (16) conversation skill. The structure of third-ager's everyday competence copes with incidents and change that people's experience at their third-age. There are also skills that third-age and successful aging need and it is assumed that they are helpful when we discuss about the criteria of continuous employment and stage employment.